作者・縄文土が訪ねるジョンとヨーコの軌跡

軽井沢探訪記「ジョンの息吹を感じて」
～対談：縄文土が目指す創作舞台の世界～

２０１８年１２月２４日（月曜日）東京・表参道にある「銕仙会」能楽研修所の舞台にて、『ダディとマザーの軽井沢物語　ヌ・ソム・ル・モンド～僕ら地球人～』が開催される。これは、能の演出家として名高い笠井賢一氏による、能舞台で行われる音楽劇である。原作は縄文土氏。敬愛するジョン・レノンの生き様に触発され、足掛け７年の月日を掛け書き上げた原作小説「ジョンとヨーコの物語」を軸に、縄文時代から５００年後の未来へと繋がる四部作からなる壮大な叙情詩を描いた。今回は四部作の最後のチャプターを舞台化した。総合プロデュースも彼が務める。「今回の舞台は劇団ジェニオの旗揚げと作品のお披露目で、ある大きなプロジェクトの幕開けに過ぎない」と彼は語る。秋晴れの10月某日、来る舞台に向け、オーディエンスを代表して、私中丸がジョンがしばしば訪れた軽井沢の各所をモンド氏と探訪し、その後テーマや意義などについてインタビューする形式で対談が行われた。対談のゲストは、ジョン・レノン愛好者でブルースギタリスト高谷秀司氏。高谷氏は、あのラリー・カールトンとアメリカでセッションを行っていた実力派のブルース・ギタリストである。対談の場所は、モンド氏ご指定の軽井沢万平ホテル。ジョン・レノンご愛用の万平ホテルのアルプス館２１８号室が用意された。２０１８年、今、なぜジョンに焦点があてられるのか。ジョンが愛した軽井沢の地で、同年代、ベテラン音楽家たちの熱い思いが語られる。

モンド「毎年、ジョンの命日である１２月８日が近づくたびに、ジョンの追悼とともに何か彼の思いに応えられるものをつくりたいなと、ジョンとヨーコのメッセージを継承することをしたいとずっと思っていました。何度目かのチャレンジなのですが、今回、初演の舞台は、いくつかの偶然や奇跡もあって、なんとか実現にこぎつけることができました」
高谷「ジョン・レノンゆかりの部屋で、こうして私達二人と中丸さんがお会いしているというのも、ちょっとした偶然ですね」
モンド「そうですね。わたしも高谷さんも１９５６年生まれ、ビートルズが来日したときにはまだ小学生だったわけだけど、テレビに流れた彼らの（日本武道館での）ライブ映像

に衝撃を受けた、そういう意味では、オンタイムで彼らの存在を感じられた最後の世代と言ってもいいかもしれませんね」
高谷「実はそのとき、わたしは武道館にいたんですよ」
モンド「おお、それはすごい！」
高谷「兄の影響などで小さい頃から音楽活動をしていたので、その辺は割と早熟でして、武道館のコンサートに立ち会う機会にも恵まれました」
モンド「それは羨ましいですね。私は新潟の一小学生でしたので、残念ながら武道館には手が届きませんでした（笑）」
高谷「いやいや。ただ、確かに今なぜジョン・レノンを取り上げるのかということを考えると、それを端的に表しているのは、何よりもモンドさん自身なんです。私自身、モンドさんにこうして会えたのは、ある方の紹介でお電話をもらい、ジョン・レノンをテーマにした舞台に関してのお話を熱っぽく語っていただいたのが始まりです。それは今年の暑い夏、８月ぐらいのことだった。この暑いのに、なんて熱い人だ！　そう思いました（笑）モンドさんの人を動かす力、人智の及ばないような『縁』。それの積み重ねで、機が熟したのを感じますね」
モンド「そう言われると、素直に嬉しいです」
高谷「わたしも、さいたまスーパーアリーナにあった『ジョン・レノン・ミュージアム』の立ち上げに関わった過去もあって、ジョンに関しては、音楽的なファンという以上に、プロジェクトとしても関心はもっていました。ですので、いまジョン・レノンがある種の復活を果たすことには、やはり興奮を覚えます」
モンド「残念ながら、さいたまのミュージアムは閉館してしまいましたね。まだ詳しくお話はできませんが、ジョンの新しいミュージアムの計画なども持ち上がっています。場所はジョンの聖地、ここ軽井沢です。この『ヌ・ソム・ル・モンド』が、ビッグプロジェクトのいいきっかけになればいいなと思っています」。

ジョンのパートナーであり、良きライバルでもあったポール・マッカートニーは、７６歳の今、いまだ現役である。インタビュー当日は偶然にも、通算７回目の来日公演が日本武道館で行われている最中だった。新曲さえ発売しているポールに対し、あっけなくこの世を去ってしまったジョン・レノン。彼の作品や存在は、歴史という箱のなかに閉じ込められ、クラッシックな存在として、若い人の目に写っているのかもしれない。ジョン・レノンを、ベートーベンやモーツアルトのような「古典」にしてはならない。そんな思いが彼らふたりの音楽家を突き動かしている。

高谷「もちろん、クラシックとは何かという根本的な問題も絡んでくるとは思うけれど、ジョンが私たちに示した『精神の原風景』みたいなものは、脈々と生き続けていると思うんです。もっと言えば、止まらないどころか、年をとるごとにジョンが自分のなかで成長しているようにさえ感じる。『イマジン』という曲の意義はどんどん成長するし、生き方の背景にあったメンタリティも成長する。わたしはそんなふうに感じますね」
モンド「ジョンは４０歳で旅立った。７６歳という年齢までどんどん進化しているポールに対して、ジョンの命は止まってしまった。ただ、存在やイメージまで止まったわけでは

ないんです。高谷さんのおっしゃったみたいに、彼の存在は多くの人々のなかでいまもどんどん進化している。ちょっと私事なんですが、僕には小さい頃生き別れになった息子がいます。彼のいまの姿は知らない、５歳の時のイメージで止まってしまっている。でも、存在はどんどん進化し大きくなる。大切さや精神は研ぎ澄まされ、どんどん進化する。ジョンは４０歳と二ヶ月というミュージシャンとしても、男としても油の乗り切った時期に亡くなった。ダブル・ファンタジーで衝撃的な復活を果たし、さあ、次は日本公演だ、待ってるぞ、って時にいなくなった。僕の生き別れの息子と一緒にしてはいけないけど、まさに最高な瞬間で瞬間冷凍されたようなかたちで、我々の心の残っているんですね」

少し時代を整理してみる。６０年代を席巻したビートルズは１９７０年に解散した。それぞれのメンバーはそれぞれの活動に移り、ジョンは子供が誕生した７５年から主夫として子育てのため長い休暇に入った。１９８０年、音楽活動を復活。しかしほどなく暗殺によるショッキングな死が報じられた。３８年前のこと現在、４０代後半に差し掛かる団塊ジュニア世代が小学生の頃である。もちろん、音楽は残る。だから、また次々と若い世代がジョンの音楽に触れるが、存在を「実態」として感じられたのは、おそらくこの団塊ジュニア世代が最後だと言えるのかもしれない。いまの２０代、３０代にとって、ジョンの存在は「伝説」でしかない。

モンド「ジョンの魅力や生き方。先程高谷さんがおっしゃった『精神の原風景』を、ジョン・レノンに馴染みのない若い人たちに伝えていくことが、私たちのミッションだと思っています。そうしなければ、僕らが音楽家として生きてきた意味さえない。大げさですけど、そういうふうにも思います。先日、軽井沢でのあるイベントで、１７歳の男子高校生が僕のところにやってきて、「僕はジョン・レノンのファンなんです」と言った。理由を尋ねてみると、４０代の父親の影響だと言う。けっきょくそのまたお父さんの影響だってわかった。もうジョンの影響は三世代に渡るんです」
高谷「まだまだクラシックになんか位置づけない。我々が働きかけることによって、ちゃんとした『伝承』が生まれ、永遠に生き続ける。僕らが生まれた年、１９５６年にロックンロールが出た。体制に対する反発のエネルギーが時代を動かした。時代の『数珠つなぎ』のなかでジョンが生き続けている背景には、反逆児だったジョンの熱い思いやグルーブ感みたいなものをいろいろな世代の人々が自然と感じ取っているんじゃないかと思いますね」
モンド「ライブでジョンを感じられた最後の世代の役割として、そのメッセージや意義を伝えていかなければならない。そのことをますます痛感しますね」

モンド氏、高谷氏が最初に出会ったアルバムは『ア・ハード・デイズ・ナイト』。ビートルズの４人の中で、最初から二人はジョン・レノン派だったそうで、いろいろなシングル・レコードを、おこづかいやお年玉をやりくりしながら集めた思い出について、ふたりは楽しそうに談笑している。

高谷「ある意味では、ビートルズのレコードは、時代の倫理観を象徴していましたよね。

だれがこんなもの買った、こんな不良の聞くような音楽はだめだ、って（笑）　学校の先生に取り上げられた思い出がある。ジョン・レノン自身も、小さい頃、ギターを欲しがった時にミミおばさんによく思われなくて、反発したりしていた。たまたま運良く、ロンドンで実際にジョン・レノンと話す機会があったのですが、実際に目の前で接してみて、イギリスと日本に共通してある、そういった上の世代の倫理観に対する反発みたいなものを感じました」
モンド「僕もちょっとだけ思い出話をしていいですか？　母の故郷が佐渡島で7月の初め実家にいた時、夕食後、いきなりガラス窓がビリビリと鳴り出し地響きのような振動が床から襲ってきて、“地震だ！”と叫んだら、母が“地震じゃないよビートルズだよ！”って。その瞬間彼らの存在を知り、それ以来感電したままなんです（笑）」
中丸「アハハ・・・笑い話のようですな。それから・・・」
モンド「それで中学高校とビートルズのようなメロディとコーラスで聞かせるバンドをやり、大学に入りレコード・デビューしてました。しかし、なかなかレコード会社のビジネスと噛み合わなかった。そんな時１９７９年大学４年の夏、ジョン・レノンに出会って人生が変わりました。丁度、軽井沢にテニスの合宿に来ていて、旧軽銀座の『フランスベーカリー』にパンを買いに行きレジの列に並んでいたら、なんかひょろっとした風変わりな西洋人がいるなぐらいに思っていたら、彼がチャリンと小銭を落とした。拾ってあげてよくよく顔をみたらジョン・レノンだった。思わず、固まりました」
高谷「なにか、お話はされたんですか？」
モンド「ちゃんと、日本語で“ありがとうございました”って言ってくれました。麦わら帽にジーンズ、無地の白のＴシャツといういでたちで、軽井沢のハイソサエティの人種とは全く違う異星人のような、しかし柔らかな物腰とメガネのレンズ越しの瞳に釘ずけになりました。店を出ると、自転車にショーン君を乗せて出るところで、僕は彼の別荘まで自転車で追いかけていったんです。しばらくすると縁側にギターを持って出てきて、歌い出し、僕は垣根越しに聞いていた・・・そんな記憶があります。」

すごい体験ですね。ジョンはなぜ軽井沢を好んだのか。いちばん簡単な理由は、妻であるオノ・ヨーコの別荘がここ軽井沢にあったからだ。１９６９年にジョン・レノンとオノ・ヨーコは結婚。１９７１年、その報告に日本を訪れた際、軽井沢の別荘に立ち寄ったのが、彼のはじめての軽井沢滞在であったと言われている。その後、７６年から７９年と４年連続でこの地に避暑に訪れていたという。その際の夜間の宿泊は万平ホテル、昼間は自由気ままに別荘で過ごしていたという。

モンド「ジョンは、息抜きを兼ねた家族水入らずの時間として軽井沢を大事にしていたんでしょう。東京のホテルに滞在していた時は骨董品を探しにいったり、歌舞伎を見たり、京都や鎌倉、箱根などにも足を伸ばしていたし、日本の文化そのものにも触れたかったんではないでしょうか。新渡戸稲造の『武士道』なんかも読んでいたみたいだし、日本の文化、メンタリティが好きだったんじゃないかと思いますね」
高谷「たしかに、嫁さんの実家の別荘という必然はあった。骨董品も好きだった。軽井沢のことも好きだった。だけど、やっぱり日本が好きだったと思います」

濃密ではあったが家族としては１９７６年から７９年の期間しかないジョンの日本滞在。ジョンとヨーコは、１９６９年結婚後、アムステルダム、モントリオールでの「ベッドイン」イベントや、ロンドン、ニューヨーク、ロサンゼルス、トロントなど多くの場所で「どんぐりイベント」「バギズム」パフォーマンスなどを行った。しかし、日本では二人の表立った活動はなかった。原作者はなぜ、ジョンとヨーコの物語の舞台を、この日本に選んだのか。

モンド「ジョン・レノンに関して、世界中で書かれた文献を読み漁りました。しかし、日本での、もっと言えば、ここ軽井沢でのジョンとヨーコに関することはほとんど描かれていない。歴史的なエピソードにしても、前後はやたらと詳しく書かれているのに、日本での滞在に関してはほとんど触れられていない。英語を母国語とする国のライターにとっては、日本は、ジョンが気まぐれで立ち寄っただけの取るに足らない場所だったのかもしれません。でも、その反対で、ジョンにとっての日本滞在の意義はとても大きかった。ヨーコさんの従兄弟にあたる外交評論家の加瀬英明さんにお会いした際、『彼ほど日本人的な人はいない』とジョンのことを評しています」
高谷「『アクロス・ジ・ユニバース』や『イマジン』など、その世界観はとても日本的ですね」
モンド「そう。彼がいつも言っていた『シンプルライフ』という考え方にしても、まさに日本人の思想そのものだった。彼は華美に見えていたけれども、普段はとても質素で、ラフな服装で、いつも自転車で軽井沢の街を楽しんでいた。「ちょっとこ汚いガイジンさん」だと思われて、お店に入るのを断られたことがあると、本人が語っています」
高谷「そうですね。この『シンプルライフ』は、いままさに注目すべきメッセージだと思いますね。彼は、英語で説明のつきにくい日本の『ＭＩＹＡＢＩ（雅）』という言葉を盛んに質問した。だいたいは、『ジャパニーズ・ビューティ』と訳されるんだけど、それでは説明がつかないし、ジョンも到底納得しなかった。ジョンは『粋（いき）』や『通（つう）』なんて言葉にも関心を持った。彼は骨董趣味などを通して、本気で日本のメンタリティに取り組もうとしていたのだと思います」
モンド「彼の母国であるイギリスと日本との文化的な呼応もあったのかもしれません。軽井沢もそういう意味では西洋的な部分もあって、ジョンは万平ホテルのこの部屋に入って窓を開けた瞬間、『これはリバプールの風だ』と言ったそうです。ここ軽井沢は、母国イギリスと日本を結びつけるちょうどいい媒介になっていたのかもしれませんね」

原作者でありプロデューサーでもあるモンド氏は、12月の舞台の制作を前に、10月中旬イギリスのロリヴァプール、ロンドンを訪れた。ご存知、ジョン・レノンが生まれ育ち、ビートルズとしてデビューした地だ。

モンド「ジョンの住んでいたリヴァプールの家（メンディップス）を訪れ、ずっと僕は２階のジョンの部屋を見ていました。その時、ジョンがあの部屋から何を見て、何を思い、歌い、考えていたのだろうと３０分ほど立ちすくんでいました。そして夕方近く薄暗くな

り始めたので、タクシーのドライバーさんにジョンの通ってた高校（クオリーバンク・ハイスクール）にと言い、向かうと、丁度午後５時、門を閉めるところに遭遇しました。僕が『日本から来ました』というと、なんと、なかなか入れない高校の中に『Come In!』と手招きしてくれ、ジョンが勉強した教室や怒鳴られた校長室、そしてジョンが歌っていた講堂に入れてくれたんです。その奇跡は、きっとジョンが、“もうちょっとしたら俺の高校に行くといいよ、見ていってくれよ”と言わんばかりで、後5分早くても遅くてもその奇跡の時間になく、そうでなければありえないと思いました。さらに、翌朝その場所さえ秘密のジョンのお母さんジュリアのお墓をある方が案内してくれて奇跡的に訪ねお参りすることができました。ああ、ジョンは僕にお母さんまで引き合わせてくれたのかと、大いなる感動とミッションを感じ、ジョンからの託宣に答えなくてはという思いで今回の音楽劇を正式にやることにしたんです」

高谷「モンドさんそれはジョンがあなたの中に降りてきたんですよ。きっと。・・・それで、リヴァプールのなにがジョン・レノンを生み出したのだと思いますか？」

モンド「今回ロンドン、リバプールにいき、なるほど、こういうところでジョンは生活し、創作の原点となったのかと、改めて感じました。ビートルズの仲間たちと住んでいたのは、駅からは少し離れたとても小さなエリアで、ペニーレイン（かつての銀行）やストロベリーフィールズ（孤児院）など、ああ、こんなに小さな場所からあんなに偉大な音楽が生まれてきたのかと、改めて感動しました。それで、ジョンが特異なのは、ひとつはやはり彼の家庭環境ですよね。お母さんが側にいない孤独な少年だった。だから、人間関係の機微や心の動きなどを小さい町の小さい関係のなかで必要以上に育んだ、それがあると思いますね。それともうひとつは、Ｔシャツにまでプリントして彼の信条としていた『ワーキングクラス（ヒーロー）』という立ち位置ですよね。階級社会が色濃く残るイギリスでこのことの意味は大きい。彼らの持つハングリー精神、そしてそれの支えとなった港湾都市・リヴァプール、それがうまく作用したのだと思いますね」

高谷「港町リヴァプールの先進性ですね。多くの人間が行き交う港だからこそ、新しい音楽、カルチャーなどがある。ジョンのお母さんも当時では新しいバンジョーを弾いていたみたいですが、オープンチューニングの使い方など、それは後のジョンの作り出すコードなんかにも影響がよく現れている」

モンド「ジョンの曲はたくさんの人に愛され、またたくさんの人に演奏もされています。ちょっと不遜な言い方かもしれませんが、今回僕は、ジョンの思いを継ぐ新しいメロディづくりに挑戦してみたかった。ジョンだったらこんなメロディを紡ぐのではないか。ジョンが生きていたら、こんな場面ではこういう曲を奏でるのではないか。自分のなかにそういった意味でのジョンが常に存在し、言うなればジョンから司令が降りてくる（笑）　ですから、今回のミュージカルは、さきほど言っていた『数珠つなぎ』ではないけれど、芝居と朗読、そして彼が生きていればこんな曲を書いたのではないのかというオリジナル曲。その大きな３つの流れが組み合わさって構成されています。しかも、それを音楽だけではなく、実際に二人が訪れた現地を私自身訪れロケ撮影することによって、ジョンとヨーコの（間で交わされたであろう）会話や行動にこだわった。今まで多くの書物や評論は出ているけれど、二人の日本での実際の会話や行動はほとんど取り上げられていなかった。それで僕はジョンとヨーコというどこにでもいるような夫婦の普段の何気ない会話、

そして、親子の会話、ここ万平ホテルのいま、我々が目の前にしているこのソファの上で実際に交わされていた二人の会話を再現してみたいと思ったんです」
高谷「それは画期的な発想ですね。私は演奏者として、ジョンのイギリス人としてのオリジナリティ、日本文化に憧れたメンタリティ、軽井沢で彼が感じていた融合。そんなものをいまモンドさんがおっしゃった『降りてくる』ような感覚で演奏してみたい。今回、モンドさんとじっくりとお話できたのは初めてなんですが、今回の舞台は一回の打ち上げ花火じゃない、永続的に１０年後、いや１００年後も続けていけるような大きなプロジェクトになるのではないかなということが、ひしひしと伝わってきました」
モンド「海外の人が知らない、日本の、そして軽井沢にあったジョン・レノンの最後のメンタリティを、能舞台という場所で感じていただきたい、そして２０２０年に向け世界中の能舞台で公演し、日本を発信したい、そう思っています。今日はどうもありがとうございました」

～・～

＜アフタートーク＞

無限のなかで人が出会う場所
ジョン・レノンという存在

ふたりの音楽家の前には、ジョンが好きだったというカクテル、『霧の軽井沢』が置かれている。軽井沢万平ホテル一階の「ザ・バー」のオリジナルカクテルである。鮮やかな明るいブルーがウッディなカウンターの照明に映える。ジョン・レノンは、稀代のスーパースターなのか、それともふつうの人なのか。対談が終わった後、カクテルを飲みながらの談笑のなかで、ふとこんな議論になった。

モンド「たしかにジョンもある意味ふつうの人だった。つまらないことで悩み苦しみ、時には羽目を外し、大酒を飲み、周囲を振り回した。ふつうの男の生きざまがそこにあった」
高谷「ふつうの人が結果的にスーパースターになった。言葉にしてしまうと簡単だけど、ジョンは常に最高の状態を目指していた、そのことが印象に残ります。そういう意味では、その事自体も、人間の行いとしては、誰もが行う、あるいは行おうと努力するふつうのことなのかもしれません」
モンド「ジョンは十分に苦悩した。母親の愛情を感じられぬまま大人になり、ビートルズを成功させ、名声と莫大な富を得た。だが、それでも満たされなかった。俺は生きてていいのか。本当に価値のある人間なのか。ずいぶんと悩んだ。それに対して、力強く『イエス』と言ってくれたのがヨーコさんで、ジョンはそれに救われた。これは人間ならだれに

でもある普遍的な悩みです。生きてていい。存在してくれるだけでいい。だれかにそう言ってもらえるだけで、人は救われるんです。ヨーコさんがジョンの死後１９８５年に歌った『アイ・ラブ・ユー、アース』という曲があるんですが、そのなかでヨーコさんは、『あなたは無限のなかで人が出会う場所』『あなたは永遠のなかで人が立つ岐路』と歌っています。地球のことを歌っているようでうが、これこそがまさにジョン・レノンという存在なんです」

高谷「やはり、ヨーコさんの影響は大きい。彼らの関係自体が壮大な物語だ」

モンド「ちょうど今から５０年前、ジョンとヨーコにとって、１９６８年はとても意味を持つ年です。ヨーコに出会ったジョンはインドに渡ったことなども影響し、『リセット』を意識し始めた。ビートルズというバンドのリセット、中途半端な状態になっていた自分の結婚生活のリセット。そして生き方のリセット。ジョンはどんどんとヨーコさんに接近し、頻繁に文通をし、愛を深めていった。その内容が実に素朴で、実に感慨深い。この手紙のエッセンスが豊富に散りばめられているのが、今回の舞台なんです。文面は想像の世界ですが」

高谷「わたしは演者でもありますが、それはいちオーディエンスとしても楽しみだ。舞台の成功を祈ります」

モンド「では、あらためて、『ダディとマザーの軽井沢物語』の成功を祈念して、主題歌♪『ヌ・ソム・ル・モンド』をかけますので、お聞きください。では・・・」

モンド・高谷「乾杯」

～・～